

令和7年度 高志中学校卒業式 式辞

3月も半ばを過ぎ、日射しの暖かさを感じる季節となりました。新年度はもう目の前に来ています。この佳き日、PTA会長・谷口直隆様をはじめ、ご来賓の皆様、そして大勢の保護者の皆様のご臨席を賜り、このように盛大に令和7年度 福井県立高志中学校の卒業式を挙げていきますことに、心より御礼申し上げます。

ただ今、90名の卒業生に、卒業証書を授与いたしました。9期生の皆さん、高志中学校ご卒業、誠におめでとうございます。皆さんは、4月から、同じ校舎内にある高志高校に進学します。そのため、「卒業」という実感が持ちにくい面もあると思います。中には、「この卒業式は必要なのか」と思っている人もいるかもしれません。そんな皆さんに、今日は「節有りて竹強し」という言葉を贈りたいと思います。

「節ありて竹強し」…この言葉は、禅の教えを表した言葉の一つだそうです。台風の後など、太くて丈夫そうに見える木が折れている一方で、細い竹が何事もなかったかのように立っている光景を目にしたことはないでしょうか。竹が折れないのは、節があり、しかもその節が硬くなるという特徴を持つからです。幹の部分（竹は稈（かん）と言うそうです）に硬くて強い節があることで、竹は中を空洞にし、軽くしなやかで折れにくい構造になっているそうです。

現在のパナソニックの創業者である松下幸之助氏は、この言葉を用いて、次のように述べています。

竹にフシがなければ、ズンベラボーで、とりとめがなく、

風雪に耐えるあの強さも生まれてこないであろう。

竹にはやはりフシがいるのである。

同様に、流れる年月にも、やはりフシがいる。

ともすれば、とりとめもなく過ぎていきがちな日々である。

せめて年に1回はフシを作って、身边を整理し、長い人生に耐える力を養いたい。

中高一貫校で学ぶ皆さんにとって、中学校と高校は一続きのように感じられるかもしれませんが。しかし中学校の卒業は、義務教育を終えるという、人生における大きな節目です。今日の卒業式が、皆さん一人ひとりにとって、これからの長い人生を支える、確かな「節」となることを願っています。

ここで少し話題を変えます。

昨年大ヒットした「国宝」という映画をご存じでしょうか。実写邦画の興行収入歴代一位、日本アカデミー賞十冠達成と、話題には事欠きませんので、聞いたことくらいはあると思います。先日の2年生の東京研修でも、この映画に触発されて歌舞伎博物館を訪れたグループがありました。私は先に原作を読んでから映画を見に行きました。多くの方が、なぜこの作品に惹きつけられるのでしょうか。映画の場合、華やかな歌舞伎の舞台などの映像の力、出演者の熱演など、原作を超えた部分も寄与しているとは思いますが、でも、私は、何よりも、「歌舞伎の道、女形の道を究めよう」と一途に歩み続ける主人公・喜久雄の生き方に、私たちが圧倒されるからではないかと思っています。

喜久雄は、歌舞伎界で生きていくためには、決して恵まれた出自ではありません。後ろ盾を失い、不遇な時期もあります。加えて、喜久雄自身、これはどうなのかという選択もします。外から作られた「節」も、自ら作った「節」もあると言えます。それでも、そういった一つひとつの「節」を積み重ねながら、自分の道をひたすら突き進んでいく姿に、私たちは真似できないものを感じ、圧倒されるのだと思います。

実は、竹の節にはもう一つ、重要な役割があります。竹には節ごとに、細胞が分裂して成長する「成長点」と呼ばれる部分があるそうです。一般的な樹木では、成長点は根や茎の先端にしかありません。ところが竹はすべての節に成長点があるため、他の樹木と比べると、節の数が30あれば30倍、50あれば50倍成長するという計算になります。つまり、竹の節は、竹の強さだけでなく、竹の成長を支えているものだということです。

「節ありて竹強し」…中学校3年間、皆さんには多くの「節」があったことでしょう。その中でも、今日という日を一つの大きな「成長点」として、新しいステージに進んでいってください。

保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。教職員を代表し、心からお祝いを申し上げます。中学校・高校の教職員が職員席に並んでいますように、本校は6年間、お子様の成長を支援してまいります。今後とも高志中学校・高志高等学校へのご理解・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、9期生の皆さんが、これからの様々な経験を自分自身を支える「節」として、竹のようにしなやかに、そして力強く真っ直ぐに成長していくことを心から願い、式辞といたします。

令和8年3月19日

福井県立高志中学校 校長 朝倉 智子